

保育者養成における SDGs を意図した授業の展開 — 幼児教育課程における取り組み —

Development of Lessons Intended for SDGs in Nursery Teacher Training : Efforts in Early Childhood Education

名須川 知子 小餅谷 哲男 葉山 貴美子 山本 弥栄子 高木 悠哉

< 要旨 >

国連が提唱した SDGs (Sustainable Development Goals) は、持続可能な開発目標とされ、17 の具体的な目標がある。それらについて、これからの保育者にとって必須となる内容であるが、実際の授業において、どのような方法で実施すればいいのか、その取り組みについて、桃山学院教育大学幼児教育課程の教員全体で授業開発を試行し、その効果を検証した。開始後 1 年目の成果について概要を示す。

キーワード：SDGs、保育者養成、授業開発、効果検証

はじめに

2019 年に国連総会で承認され、2021 年 5 月に実質的なスタートが切られた「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に向けて (ESD for 2030)」は、2020 年～2030 年における ESD の国際的な実施の枠組みであり、ESD の強化と SDGs の 17 の全ての目標実現への貢献を通じて、より公正で持続可能な世界の構築を目指すものである。「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(中央教育審議会、2016) や幼稚園教育要領⁽¹⁾(平成 29 年 3 月)においても、教育課程全体の取組を通じて、子どもたち一人一人が、自然環境や地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え実践できるようにしていくこととして、持続可能な開発のための教育 (ESD) を目指している。こうした流れを受けて、幼児期から大学まで ESD と SDGs を実践することが課題となってきた。しかし実際のところ、汐見(2021)の指摘通り、ESD と SDGs における保育現場の実践については、まだ萌芽的な実践や理論化の段階であるといえる。しかし、今後は就学前の保育・教育として、保育者自身の意識の醸成が必要である。そこで、本学の保育者養成カリキュラムの中に持続可能な意識をもち、その具体的な内容・方法について養成課程のカリキュラム開発として効果を踏まえた内容を開発していくことが本研究の目的である。これまで授業展開については、『桃山学院教育大学 教員養成カリキュラムの持続的構築— 幼児教育課程と健康・スポーツ教育課程を焦点にして—』(名須川・中村、2022) に、SDGs の観点に基づく保育内容総論、音楽表現、人間関係、健康、障がい児保育

の授業における試行内容を紹介している。さらに、2022年度から保育者養成の方向性としてSDGsに焦点をあてた新たな養成校カリキュラムの展望を考察するために、本論では、これまでの取り組みに加えて新たな授業展開の内容について述べる。

倫理的配慮

本研究は、学生のアンケートや記載について引用しているが、本学の研究に関する倫理指針に基づき個人情報を守り、個人が特定できないよう配慮した。桃山学院教育大学研究倫理委員会で承認を受けている。(承認番号:R2022-006ME)

1. インターンシップ実習におけるSDGsの取り組み

実際のインターンシップ実習における保育実践を通してSDGsの観点と捉えると、本学の幼児教育課程では、「SDGsの専門性を持つ保育者養成」を教育の軸として、専任教員の全ての講義で保育とSDGsの繋がりを学ぶことをカリキュラムに位置づけている。2021年度試行を経て、2022年度から本カリキュラムを始動している。1年次においては、専門科目の中でSDGsの観点から保育実践を考える機会を得、SDGsの基礎的な学習をしている。2年次においては、前期に実施しているインターンシップ実習において、次の2点で指導を展開している。一つめは、保育現場の観察や補助的役割を通して教員や保育者等の子どもと接する仕事の実際を知り、体験実習を通して自らの職業適性を見極めること、二つめにSDGsの観点におけるESDの課題を保育実践の場につなげていく学びである。インターンシップ実習は、週に一度、同じ教育現場でインターンシップとして実地体験学習を行ない、実習にかかわるオリエンテーション、事前研修、振り返り、グループ討議、インターンシップ報告会等のプレゼンテーションを行なっている。実習生にとっては、保育園の一日を子どもたちとともに過ごし、園の保育内容や保育方法について学ぶ機会となる。実習生が体験した主な実習内容は、①保育活動の参加（お当番活動の付き添い、あそびへの参加、プール保育の補助、散歩の引率、行事への参加、避難訓練の参加）、②保育業務の手伝い（教材作成の手伝い、絵本読み聞かせ、園の貸し出し絵本の配布）、③食事（給食、おやつ）の準備（配膳）、食事介助、片づけ、④排泄、手洗い・着替えの援助、⑤午睡の準備（布団敷き）、入眠援助、⑥清掃（保育室、トイレ、廊下、給食室、屋上プール、駐車場、裏門）であった。

(1) 2年次科目「人間教育演習1」におけるSDGsの取り組み

授業1コマで、「保育の中に見るSDGsの活動」というテーマ設定にて、授業を展開した。本研究の対象となった2年次生は既に1年次でSDGsについて学んでおり、基本的に知識は持ち合わせていると推測された。そこで、再度、SDGsに関する知識を学習し、受講生がSDGsにおける17の目標を学んでいる前提であることを確認し

た。さらに、保育実践と SDGs の活動の関連を考慮できるよう、SDGs に取り組んでいる、ある保育園の実践を取り上げた番組の動画を視聴した。その後、SDGs の活動だと思われる保育活動を抽出し、KJ 法を実施した。KJ 法は、さまざまに思いついた、断片的かつ雑多な情報やアイデアを関連性の高い単位で分類し、効率的に整理する目的で用いられる。本来は、アイデアの発想、量産の工程としてブレインストーミングによりアイデアを出し合う作業が求められるが、授業時間の関係でグループによるブレインストーミングを実施せず、一定の制限時間を設けて各自でアイデアを量産する作業を行なった。情報ソース（テーマに基づいた意見、感想）の収集は、量産したアイデアを付箋紙に書き記した。その際、保育の中で SDGs の活動だと思われたことについて単語でもよいので書き記すこと、複数の意味を持った内容を記述しないこと（一つの付箋紙に一つのアイデアを記すこと）を留意点とした。参加者は 15 名、収集された付箋紙は 92 シートであった。授業後、担当教員が、得られた定性情報におけるそれぞれのカード（付箋紙）を意味合いなど質的に類似しているもの同士で数枚ごとにまとめた。どこにも属しそうでないカードは無理に分類しなかった。最初は小さいグループを編成し、グループのラベリングを行ない、これらの作業を繰り返しながら、より上位概念で分類できる大きなグループに編成していった。最後に、最終的に収集されたグループをそれぞれの関係性を考慮しながら配置し、グループ同士の関係性や因果関係などは、線や矢印などの記号を用いて全体像を図式化した（図 1）。図式化した資料は、再度受講生に配布し、SDGs の観点で考えられる設定保育について、指導案の略案を考える課題を提示した。

（２）保育の中に見る SDGs の活動

質的データをグループ分類した結果、保育活動の中における SDGs の活動は、栽培や飼育、食育、差別撤廃やジェンダーの問題など、多岐にわたった。特にリサイクルや分別、節約などのアイデアは、60 枚を超え、出されたアイデアの三分の二以上を占めていた。具体的な保育活動における節約として、「園だよりをペーパーレスにし、メールで知らせる」、「紙パンツでなく、布おむつを使用する」や「サイズアウトした制服や靴をバザーに出す」「卒園児が使用していた園のリュックはリサイクルする」などのアイデアも出された。リサイクルは、保育活動においてもさまざまな場面で見られ、この視点は制作保育にも生かされている。制作活動に使われる素材は、生活で排出される廃材や自然環境と触れ合った時の樹木や植物などである。これらは環境問題の改善をめざす視点に基づいており、まさに、中教審（2016）のめざす「自然環境や地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え実践できるようにしていくこと」につながっている。また、出されたアイデアの根底には、いずれも SDGs 目標 4 の「質の高い教育をみんなに」があると考えられ、性差やあらゆる差別の撤廃による視点や異なる

① インターンシップ園での SDGs の取り組みについて

インターンシップ園で SDGs を意識した保育活動の取り組みがあったかについては、「はい」7名、「いいえ」3名、「わからない」6名、未記入2名であった。「わからない」という回答が多く、同じ実習先でも学生により「はい」「分からない」と回答が分かれるなど、配属クラスの担任が意識的に取り組んでいるかどうか、学生が SDGs を意識して観察・洞察できているかどうかにより、回答に違いが出るのが推察された。今後、より意識を向けられるよう振り返りを工夫していく必要があるだろう。具体的な取り組みについては、以下の表1のような記述があった。

表1 インターンシップ園での SDGs の具体的な取り組み

ペットボトルを半分に切り、そこに穴をあけてペットボトルシャワーを作りプールの時に使った。
制作をする際に、使い終わったカップ麺の容器などを使っていた。
牛乳パックで作ったおもちゃを使ったり、牛乳パックをつなげて仕切りを作ったりしていた。
水遊びやプール遊びの時に、プリンやゼリーのカップ、ペットボトルをおもちゃとして使っていた。
箱を捨てずに何かの入れ物に使っていた。
ご飯を残さないよう、先生たちが食べることをスムーズに行えていない園児たちに食べるよう促していた。
「質の高い教育をみんなに」の取り組みとして、絵本をたくさん読んでいた。
ジェンダー平等のために制服制度を無くしていた。
SDGs に関わる本が置いてある本棚があった。
SDGs の項目を子どもたちの前で説明し、華道を通して自然と触れあっていた。

KJ法の取り組みも踏まえ、フードロス削減や廃材の利用に目を向けた学生が多く、園として明確に SDGs を意識して取り組んでいることがわかる内容もあった。

② 今後の保育実習で意識して取り組みたい SDGs の目標とその理由

全記述内容から学生の意識に関して3点示す。第1に最も多く選ばれたのは、「5. ジェンダー平等を実現しよう」(8名)であった。女性へのエンパワメントの視点というよりは、性の多様性・LGBTQを意識した内容と、名前の呼び方、ステレオタイプな色や性格の決めつけなど、保育者の意識や言動が子どもたちの育ちに影響を及ぼすことを意識した内容であった。また、「10. 人や国の不平等をなくそう」(5名)と「16. 平和と公正をすべての人に」(1名)でも、人種差別を含め差別をなくすこと、平等についての考え方を幼児期から学ぶ大切さをあげていた。

次に、「2. 飢餓をゼロに」(6名)、「1. 貧困をなくそう」と「2. 飢餓をゼロに」(2名)、「12. つくる責任つかう責任」(6名)、「6. 安全な水とトイレを世界中に」(4名)といった目標も多く選ばれた。インターンシップで食事・手洗いの援助、制作活動を経験し、フードロス削減・リデュースの取り組みを具体的に理解し、ものや水の大切さを子どもや保護者に教えたい気持ちが現れていた。さらに、少数意

見であっても、「3. すべての人に健康と福祉を」「14. 海の豊かさを守ろう」(3名)、「4. 質の高い教育をみんなに」(2名)、「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」「13. 気候変動に具体的な対策を」「15. 陸の豊かさを守ろう」「17. パートナリーシップで目標を達成しよう」(1名)もあげており、全体として、SDGsの17の目標のうち14が選ばれるなど、多面的にとらえていることがうかがえた。

インターンシップ日誌へのコメント記入や授業内の振り返り活動では、子どもの発達や子ども同士の関係性、環境構成や保育者の援助に注目させたり、保育上の悩みや疑問に対応したりすることが中心となっているが、あらためてSDGsに焦点をあてて検討することに意義があることが確認できた。興味深かったのは、「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」の目標に対し、「探求心、好奇心を養う。造形遊び、感触遊びなどを通して、園児たちの柔軟な思考力(探求心、好奇心)を養い、産業の技術力革新の担い手が誕生するきっかけを作る。」と記述した例である。上垣内(2018)は、「保育はすでにESDを内包している。保育者自身の意識改革がESD実践の鍵となる。」「保育援助には、『今、ここでの充実』と『将来の結実』という二重性が求められる。」と述べており、発達特性に基づき、身の回りにある遊び、主体的な活動としての遊びから学ぶ子どもの充実した姿から未来を想像する感性が育っていることも感じ取れた。以上のことから、保育活動の中にはさまざまなSDGsの目標を組み込むことが可能であると感じ取れ、今後さらに具体化しESDの観点をもった保育実践を構想する力をつけていければと考える。

③ 今後の保育実習で展開できるSDGsを意図した保育活動の保育案について

SDGsを意図した保育案を考えた回答から、表2の4件を例示した。インターンシップ先が後期の保育実習先になる学生が多く、配属クラスの子どもの年齢や園の保育環境をイメージし、導入から展開の流れの大枠を考えることができつつあるといえる。後期の授業で、各自の保育案を持ち寄ってグループで意見交換することを通して、SDGsが学べる絵本をより意識的に取り入れたり、どのように保育を展開していくのがよいか、より具体化したり、視野を広げていくきっかけを作ることができれど考えている。今回のレポートでは目標番号を単独であげることで注目させることを意図したが、SDGsの目標の多くは密接に関係している。例えば「もったいないばあさん」は環境問題だけでなく、世界の平和やいのちの大切さにつながるメッセージをもっている。よりSDGsを学べる保育を具体化していく力をつけていくことが今後の課題である。また、各教員がそれぞれの授業で実践しているSDGsの取り組みを共有し、今後、学生の成長段階に合わせた系統的なプログラムを検討し、ESDの担い手となる保育者養成を行っていければと考えている。

表2 SDGsを意図した保育案の例示

例1	年齢	3歳児クラス
	保育のねらい	・日常生活から節電・節水を身に付けてもらうように努力してもらうため。
	導入保育	・絵本「もったいないばあさん」を読む。
	展開	・園内を回り、もったいないところが出ている箇所を探しに行く。
例2	年齢	4歳児クラス
	保育のねらい	・生き物の状況を知り、地球も生き物も大事にする力をつけてほしい。
	導入保育	・魚が出てくる絵本の読み聞かせを行う。
	展開	・自由に魚の模様を描く。 ・子どもたちが作ったきれいな魚たちが、海の中で快適に過ごすにはどうしたらいいか、などの話し合いを行い、「海の豊かさを守る」というSDGsの活動につなげる。
例3	年齢	5歳児クラス
	保育のねらい	・食品ロスを減らすための工夫を考える。 ・資源の循環を体験する。
	導入保育	・絵本「あらペンのおねがい」を読む。 ・食べ物の大切さ・ありがたさをみんなで考える。
	展開	・残菜でコンポストを作ることを提案する。 ・園児とともに給食室から残菜を受け取り、コンポスト容器に入れてシャベルでまぜる。 ・毎日当番制でコンポストに取り組むよう、当番を決める。 ・完成したたい肥は、野菜の栽培に活用できることを伝える。
例4	年齢	5歳児クラス
	保育のねらい	・食べ物の大切さを知る。 ・食べ物を作る大変さを体験する。
	導入保育	・食べ物に関する手遊びを行う。 ・食べ物を作る絵本、または貧困の絵本を読む。
	展開	・実際に食べ物を自分たちで栽培する。すぐに出来やすいきゅうりなどを選び何日かかけて子どもたちの手で育て、収穫する。 ・収穫した食材を使って、クッキングを行い、自分で食べる。そうすることで作る大変さを学ぶとともに食べ物の大切さを知ることができ、自分で作ったからこそ嫌いな食べ物でも食べることができる。 ・次は何を作りたいかを子どもたちに聞いて、この活動を2ヶ月に1回ほどのペースで行っていく。

2. 保育領域（健康）における SDGs

①目的：領域（健康）の講義内で、SDGs について学生の理解を深めるとともに、領域（健康）の学習内容と SDGs との繋がりについて学生が思考することが可能な講義実践の紹介と、それによる学生の振り返りの分析を行うことを目的とする。幼児教育・学校教育においては、一部の領域・教科で SDGs 教育を取り扱うのではなく、あらゆる領域・教科において SDGs を意識した教育を進めていく必要がある（みやざき，2022）にも関わらず、領域（健康）の講義内で SDGs 教育を行った先行研究は著者の知る限り認められない。しかし、2 要領 1 指針の領域（健康）のねらいと内容の中には、SDGs の観点を含めることができ、また、従来の領域（健康）に関わる保育実践にも、SDGs の観点が内包されている。さらには、5 領域は明確に区分して保育実践を行うものではなく、SDGs を講義に積極的に取り入れていると考えられる領域（環境）と領域（健康）には関係性が認められる（清水，2022）。したがって、領域（健康）の学習内容と SDGs を結び付けることが学生には可能であ

ることが予測される。

②方法：「保育領域（健康）」を受講する大学生 13 名（男性 2 名、女性 11 名、大学 2 年次生）が参加した。手続きとして、2021 年後期（10 月より 1 月）大学講義内の第 15 回最終講義において授業実践を行なった。本講義は、講義の最終まとめにあたる期間であった。講義タイトルとしては「最終まとめ：世界の現状から未来の子ども達に必要な保育について考えよう」とした。なお、講義資料を研究として使用することに対する同意を書面にて求めた。講義は、①SDGs について理解を深めるワーク、②SDGs の概要動画、③保育領域（健康）で学習した内容と SDGs を繋げるグループワークと振り返りシートへの記入の流れで行った。SDGs について理解を深めるワークは、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（2019）による「先生・ファシリテーターのための持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集」よりアクティビティ 2 「15 年前の世界と未来（2030 年）の世界を考えよう」を一部改変して使用した。このワークは、2001 年と 2016 年の『人間開発報告書』（UNDP）でレポートされた人口や女性の国会議席数などの 6 種類の統計資料をグラフに示し、それぞれが何の数値を表しているかについて、参加者ごとにクイズ形式で記入した後、グループワークでそれぞれの解答について議論し、正解を聞いた後に、2030 年にそれぞれの指標がどうなっているかを理由とともに書き出し、グループの願いを記入するものであった。このワークを行った後、YouTube 上の国連 WFP チャンネルにて配信されている動画「SDGs って何だろう？（学生向けバージョン）」を視聴した。動画の内容は、SDGs の 17 の開発目標について紹介し、これらの達成の重要性を説明するものであった。それらの後、「保育領域（健康）で学習した内容に SDGs をつなげることは可能か？」をテーマにグループで議論してもらい、最後に、保育所保育指針（2017）の保育領域（健康）のねらいと内容を示した上で、「SDGs の観点が保育領域（健康）に基づく保育に必要と感じますか？理由も含めて記入してください」というタイトルの振り返りシートに記入させた。

結果および考察：13 名の参加者のうち、SDGs の観点が保育領域（健康）に基づく保育に必要ないと回答した学生は 0 名であった。講義振り返りシートの自由記述をもとに KHcorder（樋口，2020）を用いて共起ネットワークを描いた結果を図 2 に示す。保育領域（健康）の内容に SDGs の観点をどのように繋げていくかについては、11 のカテゴリーで構成された。C1 は、保育領域（健康）のねらいである基本的な生活習慣を身につけ、見通しをもって行動する事に対する保育に SDGs の目標 1 「貧困を無くそう」および目標 2 「飢餓をゼロに」を含めていけるとする記述で構成された。特にフードロスやゴミの分別から子ども達の食事や清潔の中で、世界の問題について意識を持てるような感覚を育むという内容が見られた。

C2 は、保育を通して目標 3 「すべての人に健康と福祉を」に関する観点を子ども

達に育んでいきたいとする記述であった。生活習慣や運動遊びを通して、子ども達自身の健康のみでなく、世界の人々も健康であることが大切な事であるという観点からの記述が見られた。C3は、保育領域（健康）の中でも、運動遊びを通して、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」および目標10「人や国の不平等をなくそう」といった感覚を子ども達に身につけてもらうような保育を行なっていく必要があるといった内容の記述が見られた。遊びの際にチームで取り組む中で仲間を大切にするという気持ちから、世界の人々を大切にすることを育むことが可能ではないかという観点で記述がなされていた。C4は、保育の中で遊びやさまざまな体験を男女が平等に行なっていける遊びが必要であるといった目標5「ジェンダー平等を実現しよう」に関する記述が見られた。C5は、特に基本的な生活習慣の食事の中で、野菜作りやフードロスについて保育活動を行うこと、目標15「陸の豊かさを守ろう」という観点を子ども達に育んでいけるという内容の記述が見られた。C6は、保育とSDGsはさまざまな取り組みから繋げていけるという学生の意見に関わるカテゴリであった。C7はSDGs自体が重要であるとの意見で構成されたカテゴリであった。C8は、基本的な生活習慣の中でも手洗いなどを通して清潔の大切さを学ぶとともに、目標3「すべての人に健康と福祉を」という観点を育むことが可能であるといった内容のカテゴリであった。C9は、社会のグローバル化が進む中で、食事を通してより良い社会とは何かについて考えていくことが可能であるといった内容のカテゴリであった。C10は給食などを通して主体的に子ども達が行なうことで、明るく伸び伸びと行動して充実感を味わえるといった内容のカテゴリであった。C11は、食事や周りの人に対する感謝の気持ちが、SDGsの観点を含めることでより広範な対象に広がっていく、といった内容のカテゴリであった。

本研究は、保育領域（健康）の講義内で、1回の取り組みでSDGsに対して理解を深め、保育領域（健康）をねらいとする保育活動にSDGsの観点をつなげていくことが可能であるかを、学生の自由記述の分析から探索的に検討することを目的とした。本研究の事例では、1回の講義のみでも、すべての学生が保育領域（健康）にSDGsの観点を繋げていくことが、子ども達にとって重要な取り組みであると回答していた。

また、どのように繋げていくかの共起ネットワーク分析の結果からは、食事、清潔などの基本的な生活習慣に対する保育の中で、SDGsの観点を含めていくことが重要であること、運動遊びの中で、仲間内での平等やチームワークの確立の過程で、世界の平和や平等についての感覚の芽生えを支援することが、子ども達が将来、持続可能な社会の担い手として活躍する上で重要であるとの記述内容が見られた。この点に関して、これまで保育領域（健康）では先行研究が認められないため、本研究が新しい知見を提供したと考えられる。その一方で、本研究はあくまで事例的な研究であり、このような講義方法が学生の保育領域（健康）とSDGsを繋げるために

有効であり、一般化可能であるかどうかについては明らかとならない。今後の研究では、定量的な検証を前提とした効果測定を行う必要があると考えられる。また、本研究は、学生の講義から得られた感想を分析したものであり、講義者が意図として保育領域（健康）と特定の SDGs の観点を繋げる保育活動を学生に享受するものではない。今後の検討として、毎回の講義トピックで保育領域(健康)と SDGs を理論的に繋げた知識を学生に享受し、また、模擬保育等を通してそれら知識を保育実践

に適用できるような取り組みが必要となると考えられる。

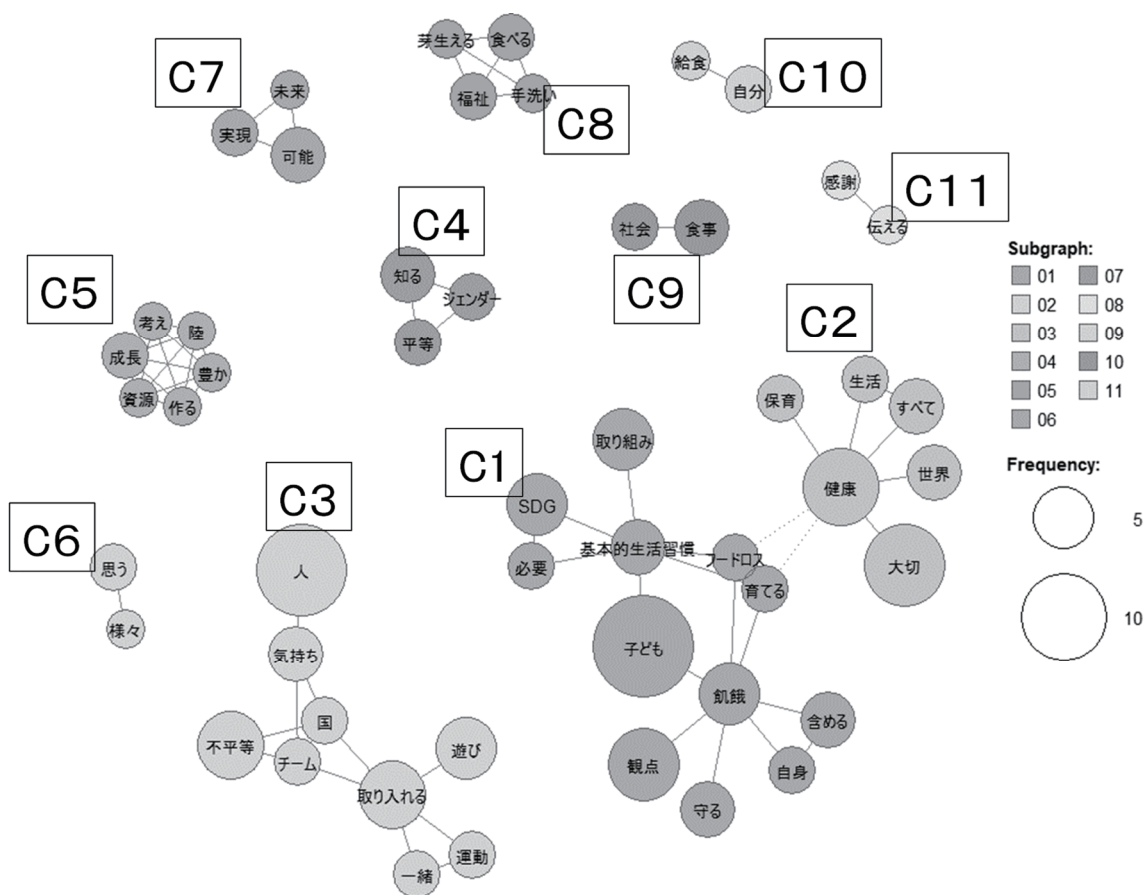


図2 講義振り返りシートの自由記述に対する共起ネットワーク分析

3. 保育領域（音楽表現）における SDGs

“質の高い音楽教育”をするためには教育者自身が基礎知識を身に付けていることが何より大切になる。現状の把握を目的として今年度の小学校教育課程と幼児教育課程における「保育領域(音楽表現)」の授業内で音楽基礎知識の理解度アンケートを行った。結果、4月に行った際には、イタリア音名・日本音名・英語音名の理解度が0%、音符の長さが26%、拍子の名称は58%、コードネームは0%で、い

ずれの項目も、身に付けておくべき基礎知識の理解度パーセンテージが低かった。しかしその後、約4か月間の基礎知識講義受講を経た前期授業終了時に再び行ったアンケートでは、イタリア音名・日本音名・英語音名が65%の理解度、音符の長さは52%、拍子の名称は78%、コードネームは43%という結果となった。基礎知識を理解することで、正しく楽譜を読み、教育現場で自分の知らない曲を指導する際にも対応出来る術を身に付けられる。実技に関しては、歌唱する際の指導留意点を「教員養成カリキュラムの持続的構築」にも記したが、今年度前期にも教育実践研究として取り組み、学生に伝授した。大切なのは大きく分けて二つ、「テクニック」と「音楽表現」である。「テクニック」に関しては主に、歌唱するための呼吸、口の開け方、子音の発音、母音の揃え方を指導した。

〈呼吸〉気張らずに発声出来る呼吸法を教授するには、まず、子どもたちに肺に空気がたくさん入ることをイメージさせるために「お腹で息を吸う」という言い方をすると理解しやすくなる。それを身体で感じるには、椅子に座ってお腹で息を吸うイメージを持ちながら呼吸し、実際にお腹が膨らむ感覚を手で確認させてみるのが良いだろう。その後、立ちながら呼吸した際にも同じ場所が膨らむことを感じさせる。ポイントは、お腹に柔らかさを保った状態で呼吸することであり、お腹が硬くなり、逆にへこんでいると誤った呼吸をしていることになるので注意が必要である。歌いだす前の準備としてもう一つ、曲の初めの音をイメージさせることで出だしの音を外さずに正確な音を出しやすくなる。曲によっては前奏のない曲もあるが、指導者が初めの和音を弾いて聴かせ、皆で出だしの音をハミングしてみるのも良いだろうし、大体の曲においては最後の4小節が前奏になるので、それを弾いて子どもたちに音をイメージさせてから歌わせることも効率的だろう。

〈口の開け方〉息を吸う際の口は、次に歌う母音の形が出来るようになるまで何度も練習する。そうすることで結果的に子どもたちの歌声もバラバラに出ず、揃いやすくなる。

〈子音の発音〉元々日本人は音節を子音と母音に分けるという概念がないので難しいのだが、歌う言葉をはっきりと伝えるためには子音の言い方がポイントになってくる。喉や口周りの余計な力は入らず脱力していることが重要なので、具体的な解決方法としては歯を噛みながら発音すると、舌の動きが分かるようになる。それを感じながら歯を噛まずに発音してみると、力まず言葉が明瞭に発せられるようになるので何度も繰り返し練習すると良いだろう。この練習法は遊びの要素も含まれるので、子どもたちも楽しみながら実践出来るのではないだろうか。客観的に聴いてみると練習前と後の明らかな発語の違いが分かるものだが、意外と言葉の明瞭さや伝え方の教授は粗末にされかねないと感じている。

〈母音の揃え方〉テクニック的に最も難解なのは母音を揃えて歌うことだろう。教育現場で歌う曲の歌詞は主に母国語であるので、日本語の「あ」「い」「う」「え」「お」

を発音すれば良いのだが、発声的に考えると日本語の発し方では喉に負担がかかってしまうのが問題点である。それに加え、西洋音楽の「美しさ」又「美しい歌」というのは母音が揃っていなければならない。しかし、日本人が普段発している日本語の発声のまま歌を歌うと、母音が揃わないため、西洋音楽的「美しさ」が伴わない。元々西洋人と東洋人では美しいと感じるものの感覚やDNAが違うので仕方ないが、西洋の音階で作られた曲は西洋の価値観で歌うべきであると思う。自身は母音の中でも日本人には「o」母音が最もニュートラルな響きで発声出来るように感じるので、まず「o」を練習する。次に口の形が近い「u」を、「o」の口にした状態で両頬に手を当てて、形をキープしたまま同じ位置で「u」と発声することを覚えてもらう。その二つが揃った後、咀嚼する時や口が開いた時に動く「関節結節」と「下顎頭」の間にある空間の「関節円板」に指を当てて「o」を発音する際に出来た空間を保持したまま、腹話術のような感じで横開きの「i」「e」や「a」母音を言う練習をし、その口の形と関節円板の空間を意識して歌を歌うと、口の形も母音によってバラバラ変わらずに母音が揃う。簡単に言うと、図で示すようなことである(図3)。

母音が揃うと言葉の音色が揃うので西洋音楽の「美しさ」が実現される事になるのである。日本語という言語自体が横開きの薄っぺらい母音であるため、本来西洋音楽の歌唱には適していない言語と言えるだろう。又、横開き母音のまま歌唱すると喉に負担がかかり声をつぶしてしまいかねない。様々な歌い方や発声があっても良いと思うが、西洋音楽の歌唱に関しては、西洋の美的感覚に準じた発語や発声をする必要があるだろう。それを理解し、普段の生活における発声にも応用することで、喉を傷めず声をつぶさない発声で教育現場に立てるようになるのではないだろうか。

次に「音楽表現」に関して述べると、“音楽”は平面的(平板)なものではなく、本来立体的であるべきなのだが、日本人が陥りやすい問題点は音楽を二次元的に平面で捉えてしまうことである。例えば articulation(奏法の指示記号)の一つである legato(レガート)は、一般的に「連続する音を途切れさせずに滑らかに続けて演奏する」と言われるが、自身としてはそれを、ただ滑らかに音を繋げるだけの二次元で捉えるのではなく、どのようにして三次元で捉えるかが重要であると考えている。具体的に言うと、フレーズには必ず三つのパターンが存在しており、ダイナミクス(強弱)が記載されていなかったとしても、①次第に大きくなる(< crescendo)、②次第に小さくなる(> decrescendo)、③次第に大きくなりその後次第に小さくなる(< crescendo プラス decrescendo >)、のいずれかで構成されている。それぞれのフレーズのどこに重きを置き、頂点がくるのかを考え想像しながら歌うことが三次元で立体的に演奏するポイントである。指導者はそれを理解し、具体的に見本を提示出来るようにしなければならない。そして、子どもたちが歌唱する際にただ

意味もなく言葉を発するのではなく、歌う前に歌詞の情景を具体的に想像させ、明確なイメージをもたせてから言葉を発することで聴き手に内容が伝わる歌唱が出来るようになる。こうしたことは数値では現れないのだが、歌詞の気持ちや情景が明確に伝わるのは大切なことで、歌唱が上手な人、聴き手の心に響く歌の歌える人は皆それが出来ている。

以上、ここまで「テクニック」と「音楽表現」について述べてきたが、テクニックについての記載量が圧倒的に多い。事実、テクニックが出来た上での音楽表現だと考えており、テクニックもまた音楽表現の一つで、とても重要なのだ。子どもたちの歌に曲としての仕上がりの精度は求められないが、現在の日本の幼児・初等音楽教育において、このようなレベルの指導はなされていないのが現状である。しかし SDGs の観点に基づく“質の高い音楽教育”とは本稿で述べてきた「基礎知識」や、演奏するための正しい「テクニック」と「音楽表現」を日本の子どもたちが学べる教育のことではないだろうかと考える。それが実現出来た先には文部科学省の幼稚園教育要領にもある「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」という幅を更に広げることが出来ると推測する。

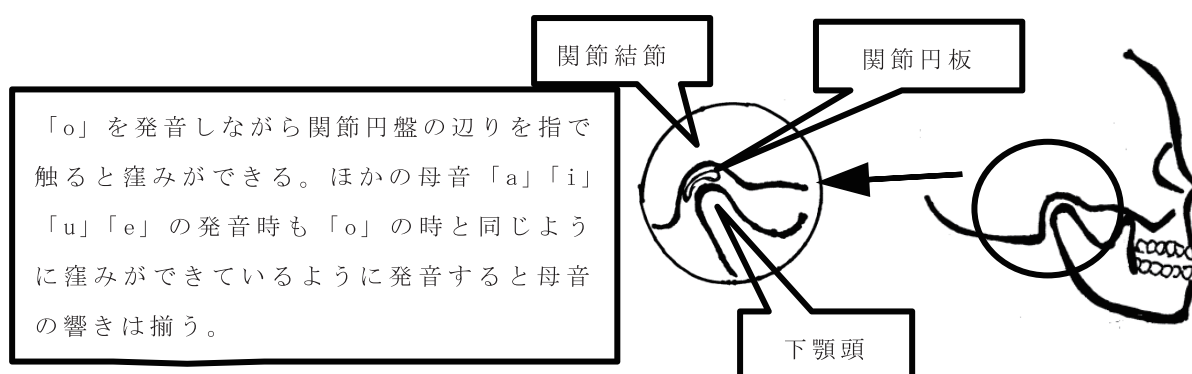


図3 歌唱のための母音の揃え方

4. 畑プロジェクトの試行

本学幼児教育課程では、2021年9月から本学の東駐車場隣にある耕作地の整備を開始し、11月から除草、整地、12月より畝と堆肥を試験的に行い、手始めに玉ネギ、ジャガイモを植え付けた（名須川、高木 2022）。そこで、2022年度の「キャリア演習1」（3年次前期）の受講生7名を対象に授業の一部を畑活動とした。

畑の実施前には、SDGsについて概要を説明し、今回の目的として、「なぜ、畑の活動がSDGsにつながるのか」「キャリア演習の一部としてなぜ、畑プロジェクトに参画するのか」ということについて説明した。授業の意図は、第1に、実際に食することのできる物を自分の手で耕作する経験をとおして、SDGsについて自分のこととして考える姿勢をもつこと、第2に、保育の現場では、畑での栽培を実

践し、園児の食育という観点から保育活動がされていることが多いことから、実習や就職の際、畑で土を触る経験が必要であることを自覚するということである。

① 実施手順：日時：2022年5月～7月、方法：7名各自の2mほどの畝を個人的に決定し、種（エンドウ豆、ミニトマト、オクラ、大葉等）や苗（ピーマン、ミニトマト、なすび）を植栽し、曜日ごとに水やり当番を決めた。基本的には自分の担当の畑の除草は各自実施し、水やりは、担当曜日に7名分を実施するというルールを決めた。

② 結果と考察：前期授業の最後に、畑を実施した内容について、体験した学生の感想を収集した。分析対象は7名であるが畑活動に関与できなかった学生が1名いた。従って、6名の記述から整理した結果、(1) 作物の生長の時間と苦労の実感、から畑づくりのよさに気付き、(2) 作物からSDGsへの気付き、の大きく2点が明らかになった。(1)では、「普段何気なく食べている野菜なのに、育てる間の時間が大変でした。食べ物を大切にしないといけないと思いました。」や「野菜を育ててみて、大変なことやしんどいと思ったこともたくさんあったけど、自分が育てていた苗に実がなった時、本当にうれしいと思ったので、この気持ちを忘れないようにしたい。」のように、実際に育てることで、日頃食べている作物への気持ちが変化したと同時に、作物ができた時の喜びを実感していることがわかる。また、「苦手な野菜がありはじめは嫌な所はあったが、少しずつ生長していく野菜を見て嬉しい気持ちになり、食べたいという意欲がでてきました。」や「自分で栽培することで、苦手なものでも意欲が湧き、食べられるようになるので、食べ残しなどなくなると思う。食べ残しが少なくなることで食品ロスも少なくなることにつながると思います。」といった、苦手な野菜や自分の気持ちから食育に関わる意見もみられる。(2)のSDGsにつながるものとして、「野菜がくさってしまい、捨ててしまうことがあったが、今回の学びで腐ったものでも、腐ったところを切り落とし、土にかえしたりなどして、ただ捨てるのではなくどうにかして再利用しようという気持ちになれるようになりました。」や「生物に限らず、植物も子どもたちと育てることによって、命の尊さが知れるのかなと感じました。」というように、野菜をとおして気持ちの変化が起こり、そのことがSDGsにつながっていくことが見られた。いずれも、自分が体験し、大変な思いも経験することで、これまでのあたりまえであったことへの大切さに改めて感じ、自らの生活の変化へとつながることがわかった。さらに、従来、各園で実践されている栽培について、自分たちで栽培した野菜をしっかりと食べることが出来るようにするという食育の目的に加え、SDGsの目標でもあり、保育に内在することが明らかになった。このような体験をとおして、今後保育者としてSDGsをとらえることにつながっていくのであろう。

おわりに

以上、幼児教育課程の5名の教員によるSDGsを意図した授業の展開について概観した。SDGsの目標について、学生が知り、学び、関わることができ、体験することによって、保育者になる自分に向かい合うこととの関連性が確認できた。このように知識と実践から新たなSDGsのアクションへ繋げることが、保育における持続可能性を推進していくポイントであると言えよう。今後、4年間のカリキュラムの中での体系性が課題である。一方、この目標について、授業内容の意図を明確にすることと同時に、受け取る側の思考・感情を動かす契機となることが求められよう。すなわち、知識に加えて、日々の身近な生活の中での事柄の中で、地球に生かされている人として何を大切なことと考えるのか、そして、将来、保育に関連する職業人として何を重要なこととするのか、このように考えることは「人間教育」を大前提とした教育者を養成する我々の使命を自覚することである。SDGsはすべての教育内容の横軸となり、その目標として存在する指標であることを意識して、さらに保育者養成のカリキュラムのあり方を模索していきたい。

あとがき

執筆分担は、はじめに及び1.の(1)(2)は山本弥栄子、1.の(3)は葉山貴美子、2.は高木悠哉、3.は小餅谷哲男、4.及びおわりには名須川知子が担当した。

【引用・参考文献】

- 樋口耕一(2020).社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－
第2版、ナカニシヤ出版
- 木戸啓絵(2021).持続可能性に向けた保育をめぐる諸外国の動向 岐阜聖徳学園大学研究紀要
53, pp.1-14
- みやざき美栄(2022).SDGsから捉える領域【表現(音楽)】の一考察 鈴鹿大学短期大学研究
紀要5, pp.113-128
- 文部科学省(2017).幼稚園教育要領(平成29年版)フレーベル社
- 文部科学省(2022).持続可能な開発のための教育(ESD)(ESD: Education for Sustainable
Development) Retrieved from <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
(2022.07.02最終閲覧)
- 日本ユネスコ国内委員会(2021).持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引き
- 名須川知子・中村哲(2022).桃山学院教育大学教員養成カリキュラムの持続的構築 銀河書房
- 清水将之(2022).保育内容・領域「健康」と保育内容・領域「環境」:その絡合的關係性
淑徳大学短期大学研究紀要64, pp.17-28T
- 汐見稔幸(2021).ESD、SDGsと保育に関する論文「発達」167号 pp.88-91 ミネルヴァ書房
- 富田久枝・上垣内伸子他(2018).持続可能な社会をつくる日本の教育 乳幼児におけるESD
かもがわ出版

全国社会福祉協議会(2022). 保育とSDGs 保育の友